

行程から読み解く魏志倭人伝と邪馬台国その2

吉 田 薫

はじめに

前稿「行程から読み解く魏志倭人伝と邪馬台国」において、1里≒77mの短里説を採用し、水行・陸行の日速度はともに300里(23km)として邪馬台国や投馬国などへの行程を示した。本稿においては、前稿で取り残していた課題を検討する。

魏志倭人伝の行程(抜粋・意識)

省略。女王国の東、渡海すると千余里でまた国があり、皆倭種である。また、その南に侏儒国があり、人の丈は三、四尺で、女王(国)を去ること四千余里である。また、裸国黒齒国はその東南にあり、船行すること一年ばかりで至る。省略。

(注) その他、航海に関しては、“持衰”の記述がある。「中国への渡海には、つねに、一人に頭を梳かせず、しらみをとらせず、衣服を垢で汚し、肉を食させず、婦人を近づけさせない。喪人のようにあり、これを持衰という。もし、航海が順調であったら生口や財物を配慮する。もし、疾病や暴害があると、これを殺そうとする。持衰が謹まなかったからだという。」

枠内に、女王国から遠方の国々への行程を示した。その内容は次のとおりである。

- ① 女王国から東に渡海すると1000余里のところに倭種の国がある。
- ② その南に侏儒国があり、その距離は女王国から4000余里(倭種の国から3000余里)である。
- ③ 侏儒国から東南に船で1年ばかり行ったところに裸国・黒齒国がある。
遠方の国々のうち、選択肢が少なく迷いの少ないところから記述していく。

倭種の国

前稿において、女王国(邪馬台国)は上古の「豊国(とよのくに)」の位置に比定したので、女王国からの出発地は国東半島東端の伊美を想定する(近隣他港でもよい)。

地図上(図-1)で、伊美から出航した場合における最初の寄港地を探ると、約40km先に祝島が見つかる。祝島は小島なので、倭種の国の入り口と判断する。

国東半島近隣の姫島を除き祝島までは寄港地がないので、倭人伝の記述どおり渡海となる。渡海は、狗邪韓国(巨済島)～末蘆国(唐津)間においても、一度につき1000余里とされている。

伊美～姫島～祝島間には古来より頻繁に利用される航路があったようだ。次の記事はホームページや地元紙からの引用である。

○姫島

姫島の黒曜石は縄文時代から採取されており、九州、四国、中国地方の遺跡で出土している¹⁾。(姫島村 HP)

○祝島

祝島から姫島、国東への航路は、古代における九州へ渡る最短コースであり、万葉集にも登場する。また、石積みの間を漆喰で固めた練塀(ねりへい)や、4年毎に伊美八幡別宮社(国東半島)からの神職などを迎えて行なう神舞がある²⁾。(祝島 HP)

○長嶋

祝島に隣接する長島の田ノ浦は中国電力の上関原発の予定地であり、その発掘調査では姫島産石器や縄文後期土器が出土し、同遺跡は縄文期に石器の加工や海上交易の拠点だった可能性が高い³⁾。(山口新聞)



写真-1 上盛山(上関町)より望む祝島と姫島

侏儒国

次に、侏儒国の位置を推定する。

侏儒国は、裸国・黒齒国への出発地である。その位置は、邪馬台国から出発して祝島に立ち寄ることが首肯でき、かつ東南遠方へ出航するのに適した場所でなければならない。

とすると、四国南端の足摺岬周辺がふさわしい。ここには唐人石やストーンサークル等からなる縄文時代の唐人駄馬遺跡があり、古代の航路の中継地であった可能性が高い。遠くからでも目立つ唐人石は、航海の目印ではなかっただろうか。

ちなみに、魏志倭人伝の研究者で邪馬壹国を提唱した古田武彦氏もここを侏儒国に比定している。



写真-2 ストーンサークルから望む唐人石

倭種の国～侏儒国の行程

倭種の国から侏儒国に向かうルートを検討するに際しては、倭種の国のどこから侏儒国に向かったかを明らかにする必要がある。祝島に限定することはできない。

まず、出発地を四国北岸部とすると、地理・地形や現在の交通事情からの推察だが、陸路は考えにくい。全否定する必要もないが、水行と比べて有利または同等でなければならない。

次に水行だとすると、四国島の西端に長く突き出た佐田岬が制約条件となる。佐田岬先端を通過することで航程が著しく長くなるような場所は中継地として不適當である。

これらの条件を踏まえて図-1 を見ると、伊美から出航して祝島を経由し、直接佐田岬に向かうルートが最もスムーズであることが分かる。よって、倭種の国からの出発地は、その玄関口の祝島とする。

祝島～佐多岬は約 50km であり、この間には寄港地がないので渡海＝1000 余里となる。

次いで、佐田岬（近辺の港）から足摺岬（近辺の港）まで沿岸航行をすると、その距離は約 150km≒2000 里である。

以上をまとめると、女王国（伊美）～渡海 1000 余里～倭種の国（祝島）～渡海 1000 余里（佐田岬）～沿岸航行 2000 里～侏儒国（足摺岬）であり、合計 4000 余里となって倭人伝の記載と一致する。

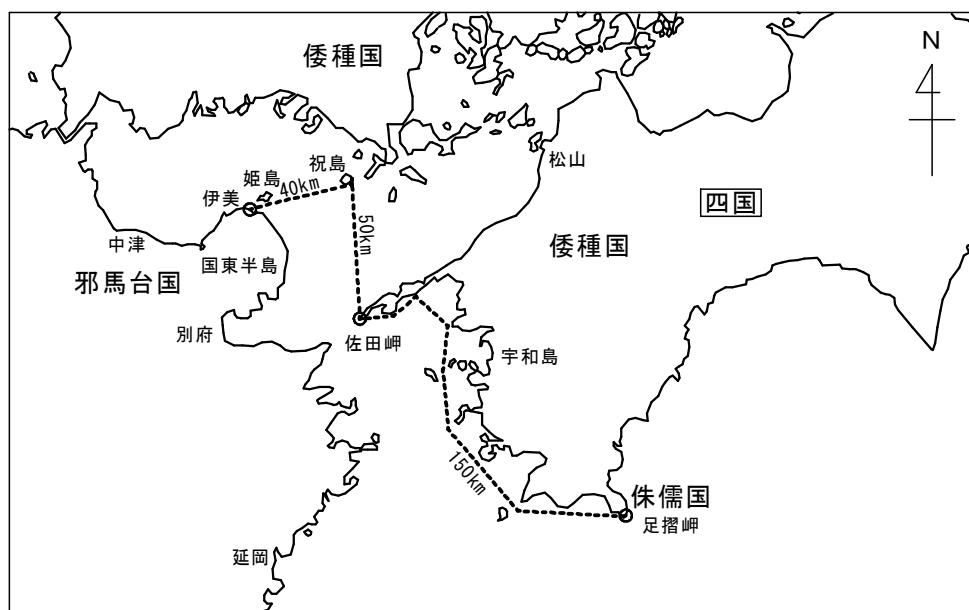


図-1 邪馬台国～倭種の国～侏儒国までの経路

裸国・黒齒国

ポリネシアにおける文化の伝播や交流関係を研究している篠遠喜彦は、「約 5000 年前 (BC3000 年) に中国の南部あたりから出発した人々が太平洋の島嶼部に住み着いた時期は、トンガが BC1500 年、サモアが BC1000 年、マルケサスが西暦 0 年、タヒチ、クック

諸島が AD850 年、ハワイが AD700~900 年、マンガレバ、イースターが AD900 年、ニュージーランドはやや遅れて AD1000 年」⁴⁾とする。

この研究成果を踏まえると、魏志倭人伝の時代（3 世紀）のタヒチやハワイは、裸国・黒齒国の候補地から外れる。

次に、方角について検討する。倭人伝は東・東南・南の区別を行っているので、東南方向は東南東~東南~南南東の範囲と解釈できる。

図-2 において、足摺岬より東南東~南南東の範囲に含まれる地域の風習・歴史は、概ね次のとおりである。

まず、黒齒国。日本のお歯黒にも通ずる染歯の風習について、ファン・ハイ・リンは、「アジアにおけるお歯黒の範囲は、一部の少数民族を除き、北は日本、南はインドネシア、西は中国の広東省、広西省の南部とインド東南部、東はソロモン・マリアナ諸島であるといえよう。」⁵⁾としている。よって、ソロモン・マリアナ諸島より西側の領域を黒齒国に比定する。

篠遠の研究によると、BC1000年~0年頃までは、サモア以西がポリネシア人の居住地であった。したがって、気候が温暖で一年中裸で過ごせることを想像させる名称の「裸国」は、サモア周辺と比定する。



図-2 裸国・黒齒国の位置
篠遠喜彦記念講演の図⁴⁾に加筆

裸国までの距離

裸国・黒齒国の範囲は広いので、サモアを目的地として行程を検討する。

足摺岬～サモアの距離は、7700km=10万里である。1日当たり300里の速度で進むと、航行（船行）に要する時間は10万里／300里=330日≒1年となる。しかし、これは10万里という距離が分かっている場合の計算方法であり、当時には適用できないであろう。

実際の航行を考えてみる。かなりの遠距離なので、昼夜兼行の帆走であったと思われる。沖縄海洋博（1975年）にミクロネシアのサタワル島からやって来たチェチェメ二号の例がある。チェチェメ二号は伝統的な造船技術で造られた帆付きのカヌーで、3000kmの距離を47日間の帆走で渡った。日速度は64kmとなる。足摺岬～サモア間の移動にも同様な船と航海技術が用いられたとすると、所要日数は7700km／64km≒120日となる。

日速度64km（830里）は、倭人伝で標準とする日速度23km（300里）の約3倍である。地誌としての一貫性を保つためには、同じ速度で行程を表現する必要がある。帆付きの船と手漕ぎの船の日速度の比をもとにして、120日の3倍の360日≒1年という結果が導き出されたのではなかろうか。

実際上も、遠距離の航海は潮流や天候、風向・風力を含めた気象条件に大きく影響される。したがって、航海可能なのは年間の一定時期に限定されるので、1年がかりの行程ということに違和感はなかったはずだ。

持衰

持衰の記述を読むと、齋戒沐浴して断食を行う修行僧のような様子が見えがえる。持衰がなぜ航海に伴われるのだろうか。

星川淳著『星の航海師』⁶⁾は、タヒチからハワイへの古代の航海の再現の過程を記録している。カヌーを用いた古代の航海は、人の五感（場合によっては第六感も）に頼るところが大きく、それを担う専任の航海師がいたことを記す。

- ・ 伝統カヌーの航海師は、太陽、月、星、雲、波、外洋のうねり、漂流物、海鳥をはじめ、海の上で人間が知覚できるあらゆる自然現象を使う。
- ・ 航海師は、カヌーの進み具合を常時把握する必要があり、平均で1日に合計2時間程度、それも眠気や疲労が限界にきたとき、10分から20分のうたたねをするだけである。
- ・ 目を閉じて内側を見、うねりの通過を体で感じる。
- ・ 目だけでなく、気配まで含むすべての感覚を総合する。（直感も）

ヨガや断食を行うと、感覚が研ぎ澄まされるといわれるが、大峰山で千日回峰行を行った塩沼亮潤氏の体験談がその著『人生生涯小僧のころ』⁷⁾に載る。

- ・何回も何回も同じ山、同じ道を歩いていると、そのたった 50mの坂道を上るときの山の匂いや雰囲気、1日の天気の変化や自分の体調がわかります。
- ・マムシが近くにいると山椒のような独特の臭いがします。マムシだけではなく、獣が何分か前に通ったら、その獣の臭いもわかります。

続いて行った、9日の間、「食わず、飲まず、寝ず、横にならず」を続ける四無行については、次のように述べている。

- ・四無行を続けていくと、とにかく五感が異常になります。たとえば線香立てに立っている線香の灰が落ちてポンと砕ける音が聞こえたり、その落ちていく様子がスローモーションで見えたりしました。遠くで話している話し声も全部聞こえるという具合で、自分の耳、あるいは目の感覚が極限まで達すると、そこまで分かるようになります。嗅覚も敏感になって、外から人が入ってくると、扉がガラリとあいた瞬間にその人の臭いで誰が入って来たのかがわかります。

人が極限状態に追い込まれると、感覚が鋭敏になり、通常は見えないものが見え、聞こえ、または感ずることができるようになるようである。

「持衰」とは、気象の変化や、船や島の位置、あるいは危険を敏感に察知し、安全に目的地に誘導する「ナビゲーター」の役割をもっていたと推察する。

おわりに

前稿に引き続き、水行は日速度 300 里 (23km)、渡海は 1 度当たり 1000 余里 (77km) として検討を進めた結果、倭種の国を経由して、無理なく侏儒国、さらには最遠地、裸国・黒齒国に行き着くことができた。

行程に示される倭種の国の位置は、その玄関口のようなものである。人の背丈が低いという侏儒国の様子は不明だが、裸国・黒齒国については既往の研究に整合した結果が得られた。魏志倭人伝の時代、相当広範囲に、そしておそらく活発に、交流・交易が行われていたようである。

未解明な点——女王卑弥呼の居館の所在地、国の位置は会稽東冶の東と記述された理由 (計其道里當在會稽東冶之東)、周辺小国の位置、そもそもなぜ魏の正尺 (1 里 \approx 434m) が使用されず、短里 (1 里 \approx 77m) が採用されたのかなど——は多いが、それらは魏志倭人伝から一義的に解釈できるとも思えず、他の文献、伝承、遺跡・遺物などから追々明らかにされる課題として預け、行程の解読はひとまず終える。

参考文献

- 1) 姫島村 HP, 姫島村役場, 2017.01.
- 2) 祝島 HP, <http://www.iwaishima.jp/>, 2017.01.
- 3) 山口新聞 : 2009年11月28日, 山口新聞社, 2009.
- 4) 篠遠喜彦 : ポリネシア考古学—ハワイ人のルーツを探る, 第1回ヤシの実大学報告書, 笹川太平洋島嶼国基金, 1998.
- 5) ファン・ハイ・リン : お齒黒文化圏に関する試論——日本とベトナムを事例にして, 日越交流における歴史、社会、文化の諸課題 (ベトナムシンポジウム 2013), pp.147, 国際日本文化研究センター, 2015.
- 6) 星川淳 : 星の航海師, pp.57, pp.114, pp.170, pp.186, 幻冬舎, 1997.
- 7) 塩沼亮潤 : 人生生涯小僧のころ, pp.83, pp.142, pp.201, 致知出版社, 2008.